



2008年6月11日放送

消化器領域と漢方医学

東海大学 医学部 東洋医学講座 准教授 新井 信

(2) 胃食道逆流症と漢方

前回は消化器領域の漢方治療についての総論的なお話を差し上げましたが、今回からは実際の漢方治療について、その症候のとらえ方や処方選択の考え方についてお話ししたいと思います。まず初めは「胃食道逆流症と漢方」についてです。

〈西洋医学的とらえ方〉

胃食道逆流症、すなわち GERD、gastroesophageal reflux diseases とは、胃液などの胃内容物が食道内へ逆流することによって生じる諸症状を包括して指します。臨床的には胸焼けなどの消化器症状だけでなく、咽頭痛や嘔声などの耳鼻咽喉頭症状、咳や気管支喘息などの呼吸器症状の原因となることもあり、プロトンポンプ阻害薬が第一選択となります。また、近年提唱されているローマⅢ基準に照合すると、胃食道逆流症は機能性食道障害の中の機能性胸焼け、機能性食道性胸痛、機能性嚥下困難、食道球、さらに機能性胃十二指腸障害の中の嚥気障害に相当すると思われま

〈漢方におけるとらえ方〉

さて、この胃食道逆流症を漢方ではどのように捉えていたのかを説明しましょう。漢方では同じ逆流症状であっても、胃から酸っぱい水が上がってきても外へは出ないものを呑酸、それを吐き出してしまうものを吐酸、飲食物が胃の中に停滞して、酸っぱい空気が胸まで上がってくるものを嘔噎、さらにその空気が音を伴って口内に逆流するもの、すなわちゲップを噯気と言って区別します。また、機能性嚥下困難は、漢方ではかくいつ膈噎として捉えられていたと考えられます。膈は胸膈のつかえ、噎は咽喉部のつかえのことで、この中には悪性腫瘍などによる器質的狭窄も含まれていたようです。食道球 **globus** は、漢方では気うつの一症状として捉えられ、多少部位は異なるものの、いわゆる咽喉頭異物感とほぼ同義と考えてよいでしょう。古くは『金匱要略』婦人雜病篇に咽中炙癭、すなわち咽に詰まった炙った肉の塊という記載が見られますが、これは後になって梅核気、近年ではヒステリー球と呼ばれたもので、半夏厚朴湯を中心とした処方を考えます。また、気の上衝ととらえて苓桂朮甘湯を用いたり、胸中が詰まったように痛いしんちゅうけつつう心中結痛、胸が塞がって苦しい心中懊惱と考えて山梔子の配合された処方を応用します。

〈胸焼けに用いる処方〉

次に、実際の治療についてお話しします。

まず胸焼けについてですが、これは一般に呑酸や吐酸などに細かく分類する必要はなく、逆流症状に対して、裏に寒があれば安中散、熱があれば半夏瀉心湯が第一選択になると思います。裏寒証では温かいものを好み、心下振水音を認めますので、これらが安中散証の特徴ということになります。また、安中散証では心窩部痛を訴えることもありますが、この痛みは芍薬を用いるような消化管攣急による疝痛 **colicky pain** ではなく、むしろ過酸による鈍痛 **dull pain** だと考えています。市販されている多くの漢方胃腸薬は安中散をベースにしていることを考えると、安中散はとても使いやすい処方であることが納得できます。これに対し、半夏瀉心湯を用いるべき病態は裏熱証で、喉が渇く、舌に厚い黄白色の苔が付くなどの徴候を認めます。腹証では心下痞鞭を認め、しばしば吐き気や腹鳴、下痢、時には不眠などの精神症状を伴う場合もあります。さらにこれでゲップを訴える場合には生姜瀉心湯にすると効果的です。この処方はエキス剤にないため、半夏瀉心湯エキスを適量の白湯に溶いたものに小指頭大の新鮮な生姜をすり下ろした搾り汁を加えて代用します。

また、茯苓飲はゲップが多くても、生姜瀉心湯と違って心下振水音が顕著な場合に考慮します。その他、胃腸虚弱が著しい場合には、弱った胃腸に着目するとよい場合も少なくありません。これは次回にお話しする予定ですが、六君子湯は胃もたれや食欲不振を訴える運動不全型 **NUD** の第一選択薬で、プロトンポンプ阻害薬不応性の内視鏡陰性胃食道逆流症に、六君子湯を併用すると有効であるというエビデンスもあります。平胃散は過食により胸やけや胃もたれ、心窩部の膨満感を生じたものによく、人参湯は六君子湯よりも胃腸虚弱が強く、下痢しやすい人の胸やけに用います。

〈気うつ症状に用いる処方〉

胃食道逆流症では胸焼けなどの消化器症状だけでなく、胸部正中の不快感や咽喉頭異物感など、さらに息苦しさなどの呼吸困難感を伴うことがあり、その結果、気管支喘息などと診断される場合もあります。これらの症候は漢方的に気うつと捉えるのが一般的で、それに対する代表的な処方が半夏厚朴湯です。この処方は妊娠悪阻に用いる小半夏加茯苓湯に厚朴と蘇葉という気剤を加えた内容ですから、悪心嘔吐にも効果が期待できます。その場合、先に述べたように、新鮮な生姜の搾り汁を加えるとさらに効果的です。半夏厚朴湯のバリエーションに柴朴湯があります。これは半夏厚朴湯に小柴胡湯を合方したもので、胸脇苦満を認めるもの、罹病期間が長引いたもの、半夏厚朴湯が無効のものに考慮します。茯苓飲合半夏厚朴湯は半夏厚朴湯証で、ゲップが多く、舌に苔が付着しているものを目標にします。また、胸部の詰まって悶々とした感じを心中懊悩と解釈すれば、茵陳蒿を含んだ茵陳蒿湯など、さらに山梔子を含んだ加味逍遙散なども用いる機会があるでしょう。

〈症例呈示〉

それでは最後に胃食道逆流症による気管支喘息に生姜瀉心湯を用いた症例を示します。症例は75歳、女性。主訴は「呼吸が苦しい」です。40歳頃に気管支喘息と言われ、苦しい時だけ気管支拡張薬を内服していました。ところが、最近はずっと胸が押さえつけられたように息苦しく、喉が詰まった感じで、ときどき空咳も出るようになりました。最近ではほぼ毎晩、気管支拡張薬を内服し、テープを貼って寝ていると言います。

この患者の喘息の特徴は、少し食べすぎたり、冷たいものを食べたりすると、すぐにみぞおちが詰まって苦しくなり、その後にはたいい呼吸苦が増すことです。そのため夕食を減らしていますが、そうすると夜の息苦しさはだいぶ軽くなるようです。その他に、胸焼けや口が苦いなどの消化器症状を訴えます。便通は2日に1回。

身長155cm、体重59kg。小太りで比較的血色のよい女性。舌には薄い白苔があり、両肺野で呼気終末に軽度の気道狭窄音を聴取します。腹部は全体に弾力があり、両側に軽度の胸脇苦満を認めます。

主訴から考えれば、柴朴湯などで対応するのが常套手段でしょう。しかし、みぞおちがつかえる、胸焼けがする、さらに「夕食を減らすと夜の息苦しさが楽になる」という特徴的な訴えを考慮して、生姜瀉心湯、すなわち半夏瀉心湯エキスにショウガの搾り汁を加えて服用してもらいました。すると2週間後「ゲップが出て、胃のつかえがとても楽になった。何かいい感じがする」と言います。1ヶ月後には、みぞおちのつかえた感じもなくなり、自己判断で西洋薬を全部やめてしまったにもかかわらず、寝る時に空腹にしていると呼吸困難がほとんど起こりません。今まで風邪を引きやすかったのですが、それも改善しました。結局8ヶ月間服用して、症状はすっかり落ち着いたため廃薬としました。

本例は「脾を強めて肺を治す」という五行論の相生関係でも説明できます。胃食道逆流

症はさまざまな呼吸器症状を呈することがあるという近年の考え方は、古代中国では経験的に理解されていたのかもしれませんが。